

イギリス国教会派の説教

—— ウィリアム・ロードと『詩篇』 ——

高 橋 正 平

序

小論は、イギリス国教会派の説教家ロード (William Laud 1573-1645) が聖書をどのように説教のなかで利用しているかを考察するものである。私は、これまで1605年の火薬陰謀事件を記念する説教について論文を書いてきた。そのなかでピューリタンが「断食」説教と称して1640年から1653年まで数多くの「断食」説教を行っていることを知った。「断食」説教は、いわゆるピューリタン革命勃発前にピューリタン説教家が同士に対して革命が計画通りに進行しないのはピューリタンの神に対する信仰心が弱体化しているからだと考え、断食と共に神に対してへりくだりの姿勢を示さなければならないことを訴えた説教である。ピューリタンの一人であるバージェス (William Burges) が「断食」説教で使用した説教はイスラエル人のバビロンからの救出をテーマにして、バビロンからの救出からイギリス社会のチャールズ一世からの救出を訴えている⁽¹⁾。その後私はチャールズ一世体制の御用説教家とも言うべくロードの説教を読むなかで、イギリス国教会派の説教とピューリタンの説教では説教の題材が異なることに気づいた。17世紀の説教の方法は説教に聖書の一節を引用し、それについて説教家は解釈を行い、イギリス社会にその一節を適応するというのが一般的な方法であった。イギリス国教会派説教家は体制維持のために聖書を利用し、反体制派ピューリタン説教家は体制打破のために聖書を利用する。では体制派説教家は聖書の利用は具体的にどのように行っているか、それを論ずることが本論の目的である。私は、イギリス国教会派説教家の代表的人物としてロードを取り上げ、ロードの説教がいかにして現体制を維持しているかを究明

したい。

ロードはオックスフォード大学卒業後聖職者の道を歩み始めたが、高教会派に傾倒したためにジェームズ一世下の宗教界では表舞台出る機会はなかった⁽²⁾。聖職者としてのロードの才能を認めたのはジェームズ一世の寵臣初代バッキンガム公(1st Duke of Buckingham)で、彼の推挙で主教になり、ジェームズ一世亡き後チャールズ一世の下では彼は一気に出世の階段を登り、最終的にはカンタベリー大主教の要職を得ることになる。チャールズ一世の下では宗教的リーダーとしてチャールズ一世の専制政治を強硬に擁護し、チャールズ一世体制の延命に奔走した。ロードの使命は反体制派への反論、抑圧・弾圧にあり、その意味ではロードは典型的な御用説教家であったと言える。ちょうどアンドルーズ(Lancelot Andrewes)が徹底したジェームズ一世擁護の説教家であったと同様に、ロードもまた徹底した体制擁護派の説教家で、チャールズ一世王朝をストラフォード伯(1st Earl of Thomas Wentworth Strafford 1593-1641)と共に支えた。そのロードの説教にジェームズ一世とチャールズ一世の下での説教がある。しかも説教の題材として挙げた聖書の一節は『詩篇』122章で、ジェームズ一世の下での説教では122章6節-7節で、チャールズ一世の下での説教は122章3節-5節である。ロードはなぜ両王に対して『詩篇』122章を選んだのか。『詩篇』は両王支持とどのような関係にあるのか。この二点を中心にして以下論じていきたい⁽³⁾。

1. ジェームズ一世とロードの説教

ロードは、1621年にジェームズ一世臨席の下で説教を行っている。1621年と言えばジェームズ一世晩年で、チャールズ一世に代わる4年前である。この説教は体制派説教家としてのロードの特徴がいかに発揮されている説教である。説教は1621年6月19日ジェームズ一世の誕生日に行われ、ロードが説教に取り上げた聖書の一節は以下の『詩篇』122章6節と7節である。

Pray for the peace of Jerusalem; let them prosper that love thee. Peace be within thy

walls, and prosperity within thy palaces.

『詩篇』122章は「ダヴィデがよんだ都もうでのうた」とある。エルサレムへの巡礼者が聖地エルサレムを思い出し、エルサレムの平安と繁栄を祈願しているとの解釈もあるが、ロードは前者の解釈に立っている。『詩篇』の作者をダヴィデとするほうがロードにとっては都合がよい。ロードがこの一節を選んだ理由を推測するにはそれほど困難ではない。なぜならエルサレムの平安への祈りがジェームズ一世王朝の平安と密接に関わっているからである。ロードは、エルサレムをジェームズ一世下のイギリス、そして作者のダヴィデをジェームズ一世にたとえているのである。それゆえ「エルサレムの平安のために祈れ」は「ジェームズ一世下のイギリスの平安のために祈れ」となり、「エルサレムを愛する者を栄えさせよ」は「イギリスを愛する者を栄えさせよ」となり、「その城壁のうちに平安があり」「もろもろの宮殿のうちに繁栄があるように」は、イギリス国内の平安と繁栄への祈願となり、ジェームズ一世体制維持への強い祈願となっているのである。『詩篇』のジェームズ一世への適応は極めて明白である。この説教のキーワードは“Jerusalem, prayer, peace”である⁽⁴⁾。これらがすべてジェームズ一世王朝と関わってくる。そして何よりもロードはエルサレムの国家と宗教の統一を述べ、それによってロードはジェームズ一世王朝の国家と宗教の統一を主張する。ロードによればエルサレムは“God’s house and the King’s”⁽⁵⁾である。エルサレムでは政治と宗教が一体化している。ロードは、ダヴィデの時代に国家と宗教はユダヤ人に託されていたと言う。

Both [the State and the Church] were commended to the Jews, and both are to us; and both under one name, “Jerusalem.” One name, and good reason for it. First, because the chief house of the Commonwealth, the King’s house, and the chief house of the God’s service, the Temple, were both in one Jerusalem. And secondly, because they are as near in nature, as in place: for both Commonwealth and Church are collective bodies, made up of many into one; and both so near allied, that the one, the Church, can never subsist but in the other, the Commonwealth; nay, so near, that the

same men, which in a temporal respect make the Commonwealth, do in a spiritual make the Church; so one name of the mother City serves both, that are joined up into one⁽⁶⁾.

ここでロードは国家と宗教の一体化を強調している。国家と宗教は近い関係にあるので、宗教は国家のなか以外には存在しえない。これは国家の長が宗教の長でもあるジェームズ一世王朝体制の露骨なまでの援護である。上記の引用で重要なのは“Both [the State and the Church] were commended to the Jews, and both are to us;”である。特に後半の“both are to us;”（我々にとってもそうである。）はユダヤ人にとっての政治と宗教の一致がイギリス人にとっても同様であるという意味で、イギリスの政治・宗教一致はその原型がユダヤ人にあることを示している。これはまたユダヤ人と同じく「神の選民」としてのイギリス人観をも示唆している。更に“...the Commonwealth can have no blessed and happy being, but by the Church.”⁽⁷⁾とあるが、国家が宗教と分離した状態では国家に幸福はないのである。国家と宗教の一致を強調するロードにとって「イスラエルの平安のために祈りなさい」はまた特別な意味を持つ。祈りによって国家と宗教が管理されるという意味ではない。国民は国家と宗教のために祈るだけではなく、両者の利益を求め、得るよう努めなければならない⁽⁸⁾。なぜ祈りなのか。それはすべてが神の下にあるからである。

Now...“pray for Jerusalem,” reacheth every man in particular; and all men when they are assembled together: — for what can a senate consult upon orderly, or determine providently, if God be not called into the Assembly? — if there be not *Deus stat*, “God standeth in the congregation of Princes?” And such a superior cannot be called into the Assembly, but by “prayer.”⁽⁹⁾

上院は神が議会に呼ばれなければ何もできない。神は祈りによってしか議会に呼ぶことはできない。ここでロードが説教にあげた『詩篇』122篇5節－6節の前の5節を見ると、そこには「もろもろの部族すなわち主の部族が、そこ（エルサ

レム) に上って来て主のみ名に感謝することはイスラエルのおきてである。」と書かれている。この後に6節の「エルサレムのために平安を祈れ」が来る。神の祈りがエルサレムのためには必要で、祈りによって「さばきの座」と神への崇拜と神への崇拜の入り口のドアが開かれる。これはエルサレムがジェームズ一世王朝に繋がることを考えると、ジェームズ一世王朝のために平安を祈ることを意味し、そのために神への祈りが必要となってくる。ここで重要なことは神への祈りがまたジェームズ一世への祈りとなってくることである。つまり、エルサレム、イギリスはジェームズ一世という神なしでは何もなしえないのである。ロードは『詩篇』からの一節によってジェームズ一世の王権神授節擁護も行っているのである。

ロードの説教でジェームズ一世と最も密接に関わってくるのは“peace”「平安」である。ロードはこの説教でもまた他の説教でもダヴィデをさかんに取り上げ、ダヴィデへの強い思い入れを表しているが、この平安に関しても最初はダヴィデ、次には息子のソロモンを大々的に扱い、「平安のソロモン」を強く打ち出している。それはなぜかと言えばジェームズ一世を意識しての発言なのである。ジェームズ一世は言うまでも「平和」を意識した王で、彼は *Rex pacificus* と称されるほどであった。ロードがジェームズ一世のこの平和への執着振りを見逃すはずはなく、説教でロードは最終的にはソロモンの再来としてのジェームズ一世像を描くのである。ロードは『詩篇』でのダヴィデの「エルサレムの平安のために祈れ」は平和時に述べられた言葉であるが、平和時であればわざわざ平和のために祈る必要はないのではないかとの疑問が出てくるが、実はこの言葉の真の意味は平和の継続のために祈ることを意味していると言う。そして注目すべきはロードはダヴィデをキリストの「予型」(type) とし⁽¹⁰⁾、ダヴィデの「平安」はキリストの「平安」に繋がるものであると言っていることである。これは最終的にはダヴィデ→キリスト→ジェームズ一世となり、ジェームズ一世の「平安」の原型は旧約聖書のダヴィデの系譜を引くものであるというジェームズ一世への最大の賛辞となる。更に「エルサレムの平安のために祈れ」は国家と宗教のために祈ることで、平安はエルサレムの至る所でも破られてはいけないとロードは言う。

...“pray for the peace of Jerusalem,” of the whole State, of the whole Church:—it must not be broken in any corner of Jerusalem, if it may be preserved. A sedition, or a schism in a corner, in a conventicle, which is the place where they are usually hatched, will fire all if it be suffered. For the State, none doubts this, and it is as true for the Church⁽¹¹⁾.

これはエルサレムの平安、秩序維持のためにはいかなる反対も許されないというダヴィデの絶対権力を擁護するものであり、それはまたイギリスの国家秩序を乱す者は決して認めることはできないというロードのジェームズ一世体制支持の表明ともなっている。ジェームズ一世体制にとって“sedition”, “schism”は決してあってはならない。それは「平安」を根本から覆すものである。しかし実際にはイギリスでは非国教徒の秘密集会（conventicle）が開かれ、ジェームズ一世体制も完全な平安な状況にあったというわけではない。たえず反王制派からの攻撃はあったのである。更にロードはエルサレムの平安はただ素手によって獲得されるのかと言えばそうではなく平安維持のためには武力すら許されると言う。それはダヴィデという人物をみれば容易に理解できる。ダヴィデは元来は武人であり、ダヴィデがサウルに知られるようになったのも彼のゴリアテ征服やペリシテ人との戦いのためであって、彼は決して武力に頼らない人ではなかった。ダヴィデは武人でもあり賢人でもあった。だからペリシテ人が神の平安を乱せばダヴィデは彼らを血に染めることもあると言う。

Therefore, if David be come in upon...“pray for peace,” it cannot be accounted only the gownman’s, or the weak man’s, prayer; but it is the wise and the stout man’s too; for David was both. And certainly it is not cowardice to pray for peace, nor courage to call for troubles...but if the Philistines will disturb God’s peace, and his [David’s], then, and not before, he will dye them in their own blood⁽¹²⁾.

国家の平安を乱す者には武力の使用も辞さないダヴィデの強い姿勢からジェームズ一世体制を揺るがす者には死をも辞さないロード決意の表明がここには見

られる。王権維持のためには反勢力の根絶する必要である。これはロードの絶対王権擁護の姿勢である。ダヴィデのエルサレムへの平安の祈りはジェームズ一世王朝の平和の祈りの「予型」なのである。ダヴィデの平安の祈りに加え、ロードは更に王としてのダヴィデの領土に触れる。ダヴィデはユダ部族の王にすぎなかったが、その後他の11部族をも併合し、全イスラエルの王となった。全イスラエルの王となったダヴィデにとって神への祈りとイスラエルの平安のために人々を説得することは王にとって最高の榮譽となる⁽¹³⁾。ダヴィデがわずかに1部族の王にすぎず、後に他の11部族の王ともなり、名目とも全イスラエルの支配者になったことはジェームズ一世王朝のイギリスの現状を考えるとジェームズ一世が文字通り全イギリスの王になることを意味する。とりわけスコットランドとの監督制の是非をめぐる争いはジェームズ一世を悩ませた問題の一つであった。スコットランドも完全にジェームズ一世に服従し、“No Bishop, No King”を唱えるジェームズ一世と同調し、ジェームズ一世が文字通り全イギリスの王となって初めてイギリスに平安は訪れるという一国一王制への強い願望がここに表れていると言っていいだろう。ロードはダヴィデの『詩篇』を説教に取り上げ、その解釈のみならず『詩篇』をジェームズ一世及びイギリスに巧みに適応していることが理解できる。何よりも現国王体制の維持・強化が求められる時代にあって説教家に課された任務はいかにして現体制を擁護するかである。そのためにロードは旧約聖書から『詩篇』を選び、その一節から現体制支持の態度を表明し、聴衆に強く訴えた。『詩篇』の記述が現体制と同じ状況にあることを指摘し、『詩篇』で行われたことを現体制が行えば事は順調に進むことを訴える。その見本が『詩篇』にあることを幾度もロードは強調する。『詩篇』なしでは聴衆に訴え、聴衆を説得する力は考えられない説教である。

ロードはエルサレムの平安のための祈りをうたった『詩篇』についての説教で、ダヴィデでの下でのエルサレムの平和と繁栄を祈ったが、この説教はまた出席者のジェームズ一世抜きにしては考えられない説教でもあった。ロードは、エルサレムについて説教をしているがそれはまた、イギリスについての説教ともなる。イギリス人にとってイスラエル人は神によって選ばれた民であり、イギリス人も1558年のスペインの無敵艦隊による襲撃及び1605年の火薬陰

謀事件と二度にわたるる国家存亡の危機を乗り越えた。それをイギリス人は神の慈悲であると考えた。丁度イスラエル人が旧約の時代に幾度となく神の慈悲により救出されたようにイギリス人も神の特別な慈悲により救出された。このような歴史的な事件を契機にイギリス人は神の選民として自らを考えるようになった。ロードの『詩篇』を基にした説教にもこのようなイスラエル人とイギリス人の類似性の指摘が見られる⁽¹⁴⁾。イスラエル人が神の保護を受け、繁栄したようにイギリスも神の援護の下で繁栄する。その格好の見本が『詩篇』にあることをロードはこの説教で訴えるのである。

2. Solomon, Peace-maker

ロードの説教はジェームズ一世誕生日に際しての説教で、説教は幾分ジェームズ一世を意識した説教であると言わざるをえない。もう少し単刀直入に言えば説教は王への追従・お世辞であるとも言えよう。ロードのこの説教はランスロット・アンドルーズの説教の模倣であると言われているが⁽¹⁵⁾、確かにロードはジェームズ一世時代の御用説教家アンドルーズを真似て王をいかにして喜ばすかに精力を注いでいる。ロードは旧約聖書の人物ではダヴィデがとりわけお気に入りであり、本説教や他の説教でもダヴィデを取り上げている。イスラエル二代目の王としてダヴィデの最大の業績は聖都エルサレムの神殿建設である。神殿建設は『歴代志上』によればダヴィデは直接建設には関わらず、彼は建設の準備をしただけである。実際に建設したのは息子のソロモンである。説教で取り上げた『詩篇』122節6節-7節はダヴィデが歌ったことになっており、それはダヴィデがいかにエルサレム神殿建設に熱意を寄せているかを示している。ダヴィデのエルサレムの平安のための祈りはジェームズ一世王朝の平安のための祈りをもロードは意図していたことは既に指摘したが、ロードが『詩篇』を持ち出した真の理由はその『詩篇』を基にしてジェームズ一世を喜ばせたいからであった。ロードのその真意は『詩篇』とその説教がジェームズ一世の誕生日祝いの説教であることを考えれば容易に理解できよう。ロードの説教はダヴィデのエルサレム平安祈願で終わらない。ロードはさらにダヴィデの息子ソロモ

ンを持ち出し、今度はソロモン→ジェームズ一世という関係を築き上げる。ダヴィデはエルサレム神殿の基礎を築き、息子のソロモンが実際の神殿建築に従事した。ダヴィデは殺害や戦争で多くの血を流したから主はダヴィデに神殿建設を許しはしなかった。主は続けてダヴィデに次のように言う。

Behold, a son is [shall be] born unto thee [David], who shall be a man of peace [rest]: for [and] I will give him rest from all his enemies round about; therefore his name is [shall be] Solomon, and I will send [give] peace and quietness upon [unto] Israel in his days⁽¹⁶⁾.

この一節は『歴代志上』22章9節からの引用であるが、ダヴィデとソロモンの関係はジェームズ一世とチャールズ一世の関係になる。聖書の記述からすればダヴィデがエルサレム神殿建設に携わらず、息子ソロモンが神殿を建設し、平安を築いたように、ジェームズ一世はイギリスの平安を建設せず、それは息子のチャールズ一世が行うこととなる。ジェームズ一世が国教会の樹立に関わらず、息子のチャールズ一世にそれを託すというのはジェームズ一世にとってはいささか不愉快であったに違いない。しかもこの説教はジェームズ一世の誕生日を祝う説教で、息子の誕生に関する説教ではない。しかし息子のチャールズ一世が父の遺志を受け継ぎ、息子が父のやり残したことを完成するということを考えればジェームズ一世にとっても満足のいくものであった。その意味では一つの説教で親子二代を称賛することになる。とにかくロードは、ジェームズ一世の誕生を祝すると同時に息子のチャールズ一世がソロモンに匹敵する賢王となり、平和を愛する王になることを予言する。しかしながら平和と言えややはりジェームズ一世である。この時代にジェームズ一世をソロモン同様“Peace-maker”として賛美する傾向があった。たとえばロードは『歴代志上』をジェームズ一世に適応して、次のように言っている。

And surely we have a Jerusalem, a State, and a Church to pray for, as well as they [the Jews]; and this day was our Solomon, the very peace of our Jerusalem, born; and

though he was not born among us, yet he was born to us, and for the good and welfare of both State and Church; and can you do other than...“pray for peace,” in the day, nay, nativity, the very birth-day, of both Peace and Peace-maker?⁽¹⁷⁾

この一節ではジェームズ一世は明らかにソロモンとなっている。ロードはイギリスとエルサレム、ソロモンとジェームズ一世、の関係を強く訴えている。ロードは、イギリス人にはユダヤ人と同じく祈りの対象として「エルサレム」「国家」「教会」があると言うが、ここではエルサレムはイギリスとなっている。またイスラエルの平和の象徴とも言うべくソロモンは「この日」に生まれたともロードは言うが、「この日」とはジェームズ一世の誕生日であり、ジェームズ一世はまさしくソロモンの再来として言及されている。しかもそのソロモン＝ジェームズ一世は国家と宗教と繁栄のために生まれたと称賛され、国家と宗教の統一の下でのみ国家は繁栄するとまで言う。その繁栄のためには「平安のために祈る」ことしかできず、それはまたジェームズ一世・ジェームズ一世王朝のために祈ることと重なってくるのである。ロードは、ジェームズ一世を最初はダヴィデ、次にはソロモンにたとえ、更にはイギリスの繁栄をイスラエル国家繁栄にたとえている。これはイギリス国家の原型がイスラエルにあることを示している。ロードの言うエルサレムは、しかし、単なる物質的なエルサレムではなく、“the Heavenly Jerusalem⁽¹⁸⁾”でもあり、精神的な象徴としてのエルサレムであり、イギリス国民の精神的支柱としてのエルサレムである。精神的象徴としてのエルサレムとはエルサレムの宗教を意味しているが、ロードはジェームズ一世王朝にとって宗教がいかに重要であるかを述べるのである。エルサレムはいわばイスラエル国家繁栄の基盤でもあったわけであるが、ロードはイスラエル繁栄は民族の対立ではなく、すべての民族が一つになり、異教徒の諸王は彼らの王へ忠誠を行うと言う。

But these converted Jews must meet out of all nations: the ten tribes as well as the rest, and become a distinct and a most flourishing nation again in Jerusalem. And all the Kings of Gentiles shall do homage to their King⁽¹⁹⁾.

国家繁栄の基礎は国家統一にある。この考えもジェームズ一世王朝のイギリス国内での特にスコットランドとの対立を意識した発言である。と同時に絶対王制確立をまって初めて国家の繁栄はあるというジェームズ一世体制への全面的支持の表明となっている。絶対王制下での平和そしてそこから生じる繁栄をロードは強く意識していた。そのためには神への祈りが必要で、なぜ祈りが繁栄に繋がるかはダヴィデによって証明される。ダヴィデはペリシテ人との戦いやサウル王との確執があったが、神はダヴィデの祈りと国家と教会への愛のために彼を繁栄させた。ダヴィデのこの前例はジェームズ一世にとってもイギリス国民にとっても格好の見本となる。王や預言者や経験ある人に不信を抱くことはできないので、必ずやエルサレムの平和のために祈れとロードは言うが、ジェームズ一世にとってもイギリス国家にとっても見本となるべく国家がイスラエルにある。イスラエルがダヴィデのお陰で繁栄したようにイギリスもダヴィデと同じ事を行えば平和と繁栄は保証される。“There is great example to move you to do so. For the kingly prophet [David] goes before you.”⁽²⁰⁾とロードは言うが“great example”とは言うまでもなくダヴィデを指している。そしてダヴィデはただ平安のために祈ったのではなく、平安に続く繁栄のためにも祈った。しかしダヴィデの平安への祈願は国家の現世での平安への祈願でなく教会の霊的な平安への祈願でもある。ダヴィデは国家と教会の外面的な平安ではなく内面的な魂の平安をも重視している。

Not “Peace” without “virtue,” and that is but a painted peace;...Peace and virtue...must be knit together in Jerusalem. For “virtue” is the strength and preservative of “peace;” and wheresoever “virtue” is not, there “peace“ will be the first that will abuse itself. Not “peace” without “faith,” for that is but a profane peace; and therefore Saint Hierome tells us, it is...our Lord Christ, that is the true “peace” of both State and Church⁽²¹⁾.

「徳」なしの「平安」, 「信仰」なしの「平安」はありえない。「国家と教会両方の真なる平安は主なるキリストである」とロードは言うが、これまでのロード

の論理からすれば「主なるキリスト」はジェームズ一世となる。つまりジェームズ一世がイギリス国家とイギリス国教会の平安の礎となるのである。なぜならばエルサレムの平安はキリストなしでは考えられないと同じようにイギリスの平安もジェームズ一世なしでは存在しえないからである。だからイギリス国民はジェームズ一世に対しては絶対服従しなければならない。ロードは聖パウロの言葉を引用し、次のように言う。

My exhortation therefore shall keep even with Saint Paul's, "that supplications and prayers be made," especially, "for Kings, and for all that are in authority, that" under them "we may live [lead] a quiet and peaceable life in all godliness and honesty."⁽²²⁾

我々の祈りは王や権力にある者に対してあり、その結果として彼らの下で信心深く正直に静かな平和な生活を送ることができる。王の安泰があって社会の人々の生活も安泰となる。ロードは再三王の存在を強調する。王は社会の基盤であり、国民の平安の礎である。王なくしては国家は崩壊し、国民の生活は悲惨なものとなる。だからいかなることがあろうとも国民は王を守らねばならない。絶対王制なくして国民の幸せは保証できない。国家と教会の両輪の支配者としての王がなしでは両輪の繁栄はありえない。それを証明するためにロードは『詩篇』に依拠した。ジェームズ一世王朝が歩む格好の見本が『詩篇』にある。ロードはそれを利用し、ジェームズ一世王朝の平安と繁栄を説いた。そもそもこの説教はジェームズ一世の誕生日を祝しての説教であり、ジェームズ一世を称賛することは説教の前から十分予想される。ジェームズ一世側に立ち、王を擁護する体制派説教家の特徴がよく表れている説教でもある。それは一言で言えばロードがジェームズ一世体制支持を真っ向から表明した説教でもあった。体制派説教の特徴はピューリタンと同じく聖書を引用しても、体制派説教はイスラエルの安定した社会からイギリス社会の安定を訴えることである。イスラエル社会の混乱した社会からの脱出を基にしてイギリス社会の改革を訴えたピューリタンとは大いに異なるところである。体制派はあくまでも現状維持の態度で説教に臨むが、彼らが先頭に立ち、status quo維持を国民に訴える。こ

の姿勢はロードには一貫して見られる姿勢である。時には追従・お世辞とも言えるほどのジェームズ一世への称賛は体制派説教家ロードにとっては当然すぎるものであった。ジェームズ一世はこの説教後ロードを教区牧師に推薦し、説教はすぐに印刷、出版された。これはロードの説教がいかにジェームズ一世を喜ばせたかの証でもある⁽²³⁾。

ロードはこの説教の5年後1626年2月に今度は国会の開会時にチャールズ一世と上院議員の前で説教を行った。その際に取り上げた聖書の一節はジェームズ一世誕生日祝賀説教に取り上げた説教と同じ『詩篇』122章であった。ただ節は異なり3節-5節であった。その説教も1621年の説教とおなじエルサレム賛美であるが、次にこの説教について論じていきたい。

3. Jerusalem at unity

1626年2月の国会開会時の説教は以下の『詩篇』122章3節-5節を基にして行われた。

“Jerusalem is builded as a city, that is at unity in itself, or, compacted together. For thither the tribes go up, even the tribes of the Lord, to the testimony of Israel, to give thanks unto the name of the Lord. For there are the seats, or, the throne, of judgment; even the thrones of the house of David.”

ロードがこの一節から何を言わんとしているかは容易に理解できる。この一節のキーワードは“unity”と“thanks unto the name of the Lord”である。エルサレムは「結び合って」いる。エルサレムは統一がとれており、混乱状態にはなかったことを示している。しかも諸部族が主の名に感謝を捧げに来るほど国内は秩序で満たされている。つまり平安なエルサレムである。なぜロードはこの一節の基にチャールズ一世の面前で説教を行ったか。それはチャールズ一世王朝にもエルサレムと同じ統一を願うためであり、チャールズ一世の下でイギリスが安定した社会となっていくことを願っているからである。この“unity”はロー

ドの説教に多く見られる key word で、それはロードがいかにかにイギリス社会の統一を願っているかの証拠である。それはまた王制打倒を叫ぶ反体制派ピューリタンへの痛烈な批判ともなっている。ロードにとってエルサレムは文字通りにはエルサレムという都市を意味し、国家とキリストの教会の象徴でもある⁽²⁴⁾。象徴としてのエルサレムはイギリス国家とイギリス国教会にも通ずる。つまりロードにとってエルサレムはイギリスという国家、チャールズ一世王朝を意味することになる。エルサレムの統一はイギリス国家の統一をも意味し、諸部族が主へ感謝の念を捧げるためにエルサレムに上ってくるとはイギリス国民のチャールズ一世への感謝表明となり、それはチャールズ一世の絶対王権支持にも至る。「統一」は「エルサレムの統一」「宗教の統一」⁽²⁵⁾を意味し、言うなれば政教の統一があって初めてエルサレムは安泰となっている。エルサレムの統一をことさら強調するロードが最も危惧するのは国家の分裂である。この危惧はジェームズ一世誕生日記念説教でも論じられていたが、ロードは「市民に一度でも彼らの統一を破らせてみよ。彼らは口論に多くを費やし、結果として都市を建設することはできない。平安なときに住民は都市の建設ができる。⁽²⁶⁾」と述べ、社会の統一なしでは平安はあり得ないと述べる。ロードこれらの発言はチャールズ一世王朝ひいてはイギリス国家にとって重要な意味を持つ。ロードは絶えずピューリタンとの対決姿勢の中で説教を行うが、いかにしてピューリタンの攻撃から現体制を守るかは体制派説教家にとっては重大な課題となる。統一の崩壊によっては都市を作ることにはできないことをロードは指摘する。エルサレムは「偉大なる王の都市」であり、「全地球の栄光（喜び）」でもある⁽²⁷⁾。それはまたロンドンが偉大なる王チャールズ一世の都市であり、ロンドンは「全地球の栄光（喜び）」ともなる。だから“the wise ordering of the people in concord and unity is simply the strongest wall of a State: but break unity once, and farewell strength⁽²⁸⁾”となる。これは絶対王への国民の完全な服従を強いることを意味している。国家の最強の防壁は調和と統一のなかでの人々の統制以外にない。では国家が分裂すればどうなるか。それには神の怒りが待っており、その神の怒りはすべてを焼き尽くす。ダヴィデによって統一されるイスラエルは以前は分裂状態にあったが、それはイギリスにおいても同様だった。ノルマン

人、デーン人のイギリス襲来はイギリス国内の分裂がもたらした結果であった。サクソン人、ローマ人の際もしかりであった。いかに国内の分裂が他国の侵略をもたらすかはイギリスの過去を見れば容易に理解できる。そこからロードは国民の一致団結しかも国家の長と国民の一体化を重視するのである。これもロードの絶対王権への国民の服従をまって初めて国家が繁栄するという彼自身の持論の表れである。国家を安泰に維持するためには国民の王への絶対服従が必要である。それなくしては国家は崩壊の危機に接する。王制打倒を叫ぶピューリタンとは真っ向から対立する考えである。チャールズ一世体制は国民の服従によって現体制を維持しようとする。しかしピューリタンはまず何よりも王制打倒を目指す。国民すべてが平等な社会はロードには考えられない。現体制をいかにして維持するか、いかに打破するか、相対立するなかでロードは現体制維持の態度を取る。『詩篇』に書かれている通りイスラエルはダヴィデの下でエルサレムでの政治・宗教の統一から国家の繁栄を見た。エルサレムをお手本とするイギリスもやはり国が繁栄するためには政治と宗教の一致が必要である。両者の統一なくしてはイギリスの安定は保証されない。これはジェームズ一世誕生日記念説教でも再三ロードが展開していた考えであるが、ロードはここでも同様の主張を行う。

Would you keep the State in unity? In any case take heed of breaking the peace of the Church. The peace of the State depends much upon it⁽²⁹⁾.

ロードは、国家の平和は教会の平和に依存していると言う。両者の共存から国に平和は生まれてくる。そしてその両者の長に立つのがチャールズ一世である。政教一致が国が生き延びる唯一の道であるとロードは考える。諸部族がエルサレムに行き、主の名前に感謝を述べたように、チャールズ一世にも国民は感謝を述べねばならない。この発言もイギリス国民は永遠にイギリス国王を崇拜の対象としなければならないことを示唆する言葉となっている。いずれにせよチャールズ一世は政治と宗教の長である。その長に国民は感謝の念を表すことによって王への支持、王への援護を明確にしなければならない。ちょうど

人々がエルサレムに来るのを止めれば一つの宗教がばらばらになってしまう危険があるのと同様、チャールズ一世への崇拜を国民が止めれば、国内は混乱のなかに投げ込まれる恐れがある。それゆえ王への崇拜、忠誠は国家が存続していくためにはなくてはならない国民の義務である。しかしなぜエルサレムという一カ所の地なのか。なぜ一つの都市に一つの神殿、一つの祭壇なのか。それはもし一カ所でないと人々は迷信に踏み込み、真の宗教を捨ててしまうからである⁽³⁰⁾。その例としてロードはソロモン死後南北に分裂したイスラエルの北王国の初代王ヤラベアム (Jeroboam) を挙げる。彼は、エルサレムに対抗してベテルとダンを聖所として「金の子牛」を置き、後に激しく批判された人物である。イスラエル分裂後イスラエルに何が起こったかはヤラベアムの行動を見れば理解できる。いかに「一つの都市に一つの神殿、一つの祭壇」が国を強固にし、国の分裂を防ぐかが容易に理解できる。ヤラベアムの例からしてもイギリスが宗教上分裂することは絶対に避けねばならないことである。二つの宗教を認めることは国家にとって自殺行為である。このような理由からロードはピューリタンの存在、主張を決して認めるわけにはいかない。ピューリタンの存在の容認はチャールズ一世体制、ひいてはイギリス国家の崩壊の容認に至ることは明白である。エルサレムには「裁きの座とダヴィデの家の座が設けられてあった」のでエルサレムには“the government both spiritual and temporal”があるとロードは言う。この論理からロードはジェームズ一世がかたくなに信じた王権神授節を擁護し、チャールズ一世の神権を援護する立場を表明する。ロードは神と王と教会の関係について次のように言う。

One and the same city honoured with God, His Church, and the King. And it must needs so. For these three, God, the King, and the Church, that is, God, His Spouse, and His Lieutenant upon earth, are so near allied, — God and the Church in love, God and the King in power, the King and the Church in mutual dependence upon God, and subordination to Him,—that no man can serve any one of them truly, but he serves all three⁽³¹⁾.

この一節は神と王と教会の関係を示すものとして特に注目を要する。とりわけ神と王の関係についてであるが、「地上における神の代理人たる王」という表現はジェームズ一世が使用していた表現である。神と王は権力において結び合っていると云うが、ロードは王権と神権の密接な関係をここで述べている。神、教会、王と一直線の関係により教会と王は相互に神に依存しており、三者は固い絆で結ばれている。これはロードの王権神授説の公言に他ならず、エルサレム神殿における「裁きの座とダヴィデの家の座」から神とダヴィデの関係をチャールズ一世と神との関係に適応し、最終的には王権神授説を擁護するという姿勢を表明しているのである。これまで述べてきた“unity”から王権の神聖へと論を展開することによりロードは正真正銘の王制支持を明確にする。ロードは更に次のように言う。

The King's power is God's ordinance, and the King's command must be God's glory; and the honour of the subject is obedience to both⁽³²⁾.

これはあからさまな王権神授説と国民の王への絶対服従容認である。王権は神に由来し、臣民の名誉は神と王への服従である、とロードは言うが、王権の神聖と臣民の神と王への服従によってのみ国家は安泰で存続しえる。この一節は『詩篇』122章に関する記述であるが、それはチャールズ一世についても適応できる記述である。ロードは『詩篇』を論じている一方で、巧みにそれをイギリスに移し換え、イギリスの現体制を擁護する。ロードが「エルサレムの神殿に上ることによって人々が行いあるいは学ぶべき最初の教訓は霊的と世俗的権威への服従であるが特にダヴィデの家への服従である⁽³³⁾」と言うとき、ロードは当然のことながらチャールズ一世への服従を考えていることは疑いえない。ロードはダヴィデに関する聖書の記述からイギリスを考える。ダヴィデの言動からチャールズ一世を考える。イスラエル人の王としてのダヴィデは、人々が知るべきこととして神が人々をダヴィデに託したこと、ダヴィデへの服従で生きる以外に神からの救出は約束できないこと、政体や王位継承を考えたりしないで神が人々を位置づけたところで従順にとどまることを挙げているが⁽³⁴⁾、こ

れは上で述べた王の絶対王権容認と王への絶対服従の勧めであり、この記述もチャールズ一世抜きには考えられない記述である。『詩篇』の文言はチャールズ一世に適応されて初めてその真の意味が理解される。だからヤラベアムがエルサレムから十部族を分裂させ、その結果として混乱と悲惨さが生じたとしてもそれは何ら不思議ではない。王国の分裂に平安はないことをヤラベアムの行動は示しており、それはイギリスが、チャールズ一世がどうしても避けねばならない事態なのである。国家が安定した平安を継続し、維持できるのは王の下での国民の服従しかありえない。強大な王権によってのみ国家は存続できるのである。ロードは民主主義とか大衆政治について無知かと言えばそうではなく、彼は王制以外にピューリタンが主張する共和制についても十分熟知していた。ロードのその態度は“None but God can “rule the raging of the sea, and the madness of the people.” And no safety or settledness, till there be a return...to a monarchy, and a King again.⁽³⁵⁾”にはっきりと表れている。海の怒りと人々の狂気を抑えるのは神しかいない。君主制と王に戻るまでは安全も落ち着きもない、とロードが言うとき、それは王以外に国を治める人はいないことを示し、共和制などという政治形態はロードには考えもつかないものである。ロードがもっとも恐れるのは王を欠くことによって生じる国内の混乱である。だからロードはサウルの不服従からイスラエルはダヴィデの家に落ち着くことによってまた秩序を回復することに言及するのである。王が不在では国は繁栄しない。王は国家の「基盤」であり、しかも安定した「基盤」でなければならない。国家の全組織はダヴィデの家の力に支えられている。それ故、ダヴィデの家を弱くすることは王国への大きな悲惨をもたらすことになり、弱いダヴィデの家は国の崩壊を意味することになる。ダヴィデの家の強化は国の強化に繋がる。これは強固な王権が国の秩序を維持することを示唆し、いうなれば絶対王権の擁護である。ロードはダヴィデの家を強大な王権の象徴としてとらえているが、その象徴がイギリスをも含むことは明白である。ロードの説教がダヴィデを論じることにより実はイギリス、チャールズ一世を論じていることは徐々に明らかになってくるが、説教の終盤でロードははっきりとダヴィデからチャールズ一世へと論を展開していく。つまりダヴィデを論じること実はチャール

ズ一世を論じることになるのである。ロードは次のように国会臨席の上院議員に呼びかける。

Well then, would you have “the house of David” as David’s was at Jerusalem, a built, a furnished, a strong, an honourable “house?” I know you would. You are a noble and a most loyal people. Why, then, I will not take upon me to teach, but only to remeber you of the way⁽³⁶⁾.

そしてエルサレムのダヴィデの家と同じ家をイギリスで築く方法としてロードは以下の4点を挙げる。それは①ダヴィデを一度立ち直させること②神がダヴィデに与えた「家」の強大さを彼に見させること③ダヴィデの人々への愛のなかで彼を喜びと満足で満たすこと④ダヴィデを快活な容貌にするために油を加えること、である。ロードここでダヴィデを使用しているが、それはチャールズ一世と置き換えてもよい。エルサレムはロンドン、ダヴィデはチャールズ一世として考えられている。この後もロードのダヴィデ称賛は続く。神によりダヴィデは多くの王としての美德を与えられており、とりわけダヴィデの「家」が国民と正義の基盤となっている。その正義はダヴィデを統一と幸福の状態の人々を守らなければならない。イスラエルの王としてのダヴィデを恐れる必要はない、とロードは言う。なぜか。神がダヴィデと共にいるからである。

And never fear him [David], for God is with him. He will not depart from God’s service; nor from the honourable care of his people; nor for wise managing of his treasure; he will never undemine his own “house,” nor give his people just cause to be jealous of a shaking “foundation.”⁽³⁷⁾

神への信仰、国民への心遣い、懸命な金銭管理、自分自身の家への配慮、国家の基盤の揺るぎを国民に見せない—非の打ち所のない人間ダヴィデが列挙されている。一言で言えばダヴィデの下にあるエルサレムは「統一」「宗教」「正義」を特徴とする。ロードは「お世辞は言っていない」というが、これはチャール

ズ一世へのお世辞以外の何ものでもない。ロードは“my dread Sovereign”とチャールズ一世へ呼びかけ，“upon you it lies to make good the thoughts of your most devoted servant.⁽³⁸⁾”と言うが、王の忠実な家臣の考えを良くするのは王次第である、という表現には王の言動が国の隅々まで浸透するよにというロードの願いがこめられている。このような完璧な王、完璧な都市からロードはイギリスへ目を転じる。

4. This Jerusalem of ours is now “at unity in itself.”

「我々のこのエルサレムは今それ自身統一の状態にある」というこの一節から我々はロンドンとエルサレムの対応関係を見ることができる。ロードにとってロndonはエルサレムである。諸部族がエルサレムに行き、神へ感謝を表したように、イギリスでも国民がロンドンに来て、王への感謝の念を表すことをロードは祈る。

I would to God they were all here, that with one heart, and one mouth, we might all pray unto God for all His blessings to come down, and dwell in the “House of David;” and to rest upon this great and honourable council now ready to sit⁽³⁹⁾.

一糸乱れぬ国民の意思統一の下で王と「ダヴィデの家」と国会に神の祝福が降りかかることを願うが、これはすべてエルサレムでイスラエル人が行っていたことで、それと同じ事をイギリスでも行うようロードは聴衆の国会議員に訴えるのである。神への奉仕とダヴィデの家への服従が求められるが、いかなる人も王を汚すことがあってはならない⁽⁴⁰⁾。ロードは“our David”とチャールズ一世を呼び、王と国民がいつでも愛のなかで会い、英知をもって相談し、会議(国会)を自制を持ってうまく扱い、大衆を苦しめるために私的な業務を持たないようにとロードは述べる。王と国民との信頼関係から安定した国家が生じることはこれまでの幾度もロードが述べたことであるが、ここでも同様の王と国民の密接な関係(それは王への絶対服従なのであるが)を主張しているところ

にロードの絶対王制支持の姿勢がはっきりと見られる。また、ロード“our Jerusalem”と言って、エルサレムに教会と国家を含めているが、これは広義にはイギリスという国、狭義にはロンドン、チャールズ一世王朝を指している。その「我がエルサレム」への祈りとしてロードは以下のように言う。

And let us pray, that our Jerusalem, both Church and State, which did never but flourish when it was “at unity in itself,” may now and ever continue in that “unity,” and so be ever successful both at home and abroad. That in this unity the “tribes of the Lord,” even all the families and kindreds of his People, may come up to the Church, to pray, and praise, and give thanks unto Him. That no tribe or person for any pretences, for they are no better, may absent themselves from the Church and testimony of the Lord. That the “seats of judgment,” ecclesiastical and civil, of all sorts, may not only set, but set firmly, to administer the justice of God, and the King, unto his people. That all men may reverence and obey the “house of David,” who itself, upon God, is the foundation of all these blessings. That God would mutually bless David, and this people. That so the people may have cause to give thanks to God for David; and that David may have cause to take joy in the love and loyalty of the people; and bless God for both⁽⁴¹⁾:

この一節はロードの説教の意図が集約されている。それは、統一の下でのエルサレムの繁栄、国民の敬虔な宗教心、神と王の恣意性の抑制、「ダヴィデの家」への崇拜と服従、ダヴィデとイスラエルの民への神の祝福、人々の模範となるダヴィデ、ダヴィデに対して忠実な国民、ダヴィデと人々のための神の祝福、である。これらの祈りはすべてがチャールズ一世及びイギリスについても言えることであり、ロードの真意はいかにしてダヴィデの言動をチャールズ一世とイギリスに適應するかにある。特に国の統一、国民の優れた宗教心それにダヴィデへの神の祝福はロードの説教の核心である。ダヴィデが国を統一したのは国民がダヴィデに対して忠実であったことと神の祝福があったからに他ならない。同じようにイギリスが国家として栄えるには国民のチャールズ一世への

忠実性と王への神の祝福が必要である。これは裏を返せば絶対王権と王権神授説がチャールズ一世及びイギリスを安定へ導き、最終的には国の繁栄をもたらすことを意味している。チャールズ一世が生き延びるには絶対王権と王権神授説という両輪が不可欠で、その両輪はダヴィデに基づくものであるが、しかし、ピューリタンとの対決のなかではその両輪は時代遅れの両輪であり、それはこの後ろくも崩れ去っていくことになる。

むすび

ロードはストラフォード伯と共にチャールズ一世政権を支えた両輪である。ロードは宗教面からピューリタンとの対決姿勢を強めていったが、ストラフォード伯は政治の面からチャールズ一世の専制政治を強硬に援護し、王の筆頭政治顧問となった。ロードは説教家として徐々に王に対して好印象を与え、最終的にはカンタベリー大司教にまで登り詰める。体制派を代表する説教家である。それ故ロードの説教が王を支持する説教となるのは当然と言えば当然のことである。小論ではロードのジェームズ一世とチャールズ一世の下での説教を扱ったが、ジェームズ一世に対しては『詩篇』122章6節-7節、チャールズ一世に対しては同じく『詩篇』122章3節-5節、をそれぞれ基にした説教であった。『詩篇』122章はエルサレムの平安を祈る内容となっている。ここで特に注意を要したいのはエルサレムの平安は単なるエルサレムの平安ではないということである。ロードは『詩篇』を論じることで実はイギリスを論じているのである。『詩篇』を基にイギリス、ジェームズ一世、チャールズ一世を擁護するのである。エルサレムがダヴィデの下で平安であったように、イギリスもジェームズ一世、チャールズ一世の下で平安であることを願うのである。だからダヴィデ→ジェームズ一世、チャールズ一世という図式が出来上がる。『詩篇』をジェームズ一世、チャールズ一世へと移し換える。それは『詩篇』の17世紀前半のイギリスへの適応と言ってもよい。その結果として『詩篇』の記述がそのままイギリスについての記述となってくる。現体制支持の説教家としてまず最初に行わねばならないことは国内の安定である。国内の安定があって初めて国の繁栄が

生まれてくる。その例証としてロードが持ち出したのがエルサレムの「統一」である。エルサレムは統一の下で平安を産み、繁栄に浴した。ロードは両説教のなかで「統一」(unity)なる言葉を幾度となく使用するが、それはロードのイギリス国内の統一への願いの表れ以外の何ものでもない。そしてその「統一」を支えるのが絶対王権と王権神授説なのである。絶対王権も王権神授説も『詩篇』から証明できるとロードは考えた。それはダヴィデがはっきりと示している。すべてダヴィデの言動を基にしてロードはジェームズ一世、チャールズ一世を支持する側に回るのである。1621年の『詩篇』122章6節-7節を下にした説教はジェームズ一世の誕生日記念説教であるので、ジェームズ一世を喜ばせようというロードの意図が見え見えの説教であることは確かである。御用説教家ロードの面目躍如たるものがある。『詩篇』122章6節-7節の「エルサレムの平安のために祈れ。エルサレムを愛する者たちを栄え、城壁のうちに平安があり、もろもろの殿のうちに繁栄があるように」はそのままジェームズ一世王朝への祈りとなる。『詩篇』の祈りはジェームズ一世体制への祈りとなり、ジェームズ一世体制の平安と繁栄を祈る内容になっている。1626年のチャールズ一世の面前での説教でもロードは同じ『詩篇』を利用した。ロードが取り上げたのは122章3節-5節であるが、そこでの鍵となる言葉は“unity”と“thanks unto the name of the Lord”である。ロードははっきりと「統一」と「主の名への感謝」と言うが、それはジェームズ一世からチャールズ一世時代への移り変わりまたイギリス社会の流動的情勢に拍車がかかっていくときでもあったからこそ一層重みの持つ言葉となってくる。ジェームズ一世王朝の時にはまだピューリタンからの攻撃はそれほど激しいものではなかった。ピューリタンよりは過激なカトリック教一派ジェズイットがむしろジェームズ一世にとっては眼下の敵であった。ところがチャールズ一世の時代になるとピューリタンが徐々に台頭してくる。それはチャールズ一世の専制政治への反発でもあり、以後1628年には議会側からの「権利の請願」によるチャールズ一世への抵抗、そしてそれを無視するかのような1629年のチャールズ一世による議会解散による「専制の11年」が始まる。イギリス社会の緊迫度ではチャールズ一世体制時の緊迫度はジェームズ一世の緊迫度よりもはるかに強い。それを反映してロード

のチャールズ一世面前での説教には緊迫感がある。ロードがしきりに「統一」「主の名への感謝」を訴えるのはイギリス社会が国教会とピューリタンに分裂することへのロード危惧の念の表れであったが、両派の統一は夢のまた夢であったことも事実である。ロードが「主の名への感謝」を口にするのは実はチャールズ一世への忠誠を訴えたいからであった。それはチャールズ一世絶対王制の維持にだけイギリスの未来はあるというロードの姿勢を強く打ち出しているのである。絶対王権と王権の神聖の両輪によってしかイギリスは生き延びる術がないのである。

ロードは『詩篇』122節3節-5節と6節-7節を説教の題材に採り上げ、ジェームズ一世とチャールズ一世を擁護しようとした。特にチャールズ一世擁護の説教は迫りつつある社会の大変動を前にした説教であり、『詩篇』を利用しての現体制擁護には十分説得力がある。ただ『詩篇』122章はダヴィデが主である。ジェームズ一世を称賛するならばソロモンをもっと全面に持ち出すべきであった。ジェームズ一世はソロモンにたとえられているが、それは部分的であって説教のほとんどはダヴィデが主となっている。ダヴィデは確かにイスラエル王となり、エルサレムを「ダヴィデの町」とし、政治と宗教の統一を目指し、イスラエルの繁栄の道を切り開いたことは確かである。しかし、ダヴィデの負の部分、バテシバとの関係、息子アブサロムの反乱等もあったことも確かである。しかしロードはこれらのダヴィデの負の部分論ずることはしない。聖書の記述、人物をある時代、ある人物に「適応」するさいには100%すべてが「適応」されるわけではない。ダヴィデの場合も彼が民衆の模範となり、国家を繁栄に導いたという肯定的な面もあったが、また、否定的な面もあったことは事実である。ロードは他にも『詩篇』を題材にした説教があり、そこでもダヴィデが強調されていることを考えるとロードはことさらダヴィデがお気に入りの人物であったようである。それも偏にイスラエルの王としてのダヴィデの指導力、民衆の結束力、政治、宗教両面における卓越した手腕のためであった。そのダヴィデをロードはジェームズ一世、チャールズ一世に適応することによってイギリス社会の運命を両王に託し、聴衆にイギリスの将来の安泰、繁栄を約束したのである。その意味ではオピニオン・リーダーとしての説教家、御用説教家

としての役目は十分に果たしたと言えよう。

注

- (1) この問題については『人文科学研究』125輯（平成21年9月, pp. 15-49で論じた。
- (2) ロードの伝記については *DNB* を参照した。ジェームズ一世がロードの昇進を遅らせた理由については Trevor-Roper によれば, ジェームズ一世が賛同しない結婚をロードが行ったからである。Trevor-Roper: *Archbishop Laud* (London: Macmillan, 1963), pp. 36-7.
- (3) ロードのテキストについては以下を使用する。William Laud: *The Works* Vol. I (1847) & II (1849) in one vol. (Hildesheim and New York: Georg Olms Verlag, 1977)
- (4) Laud, p. 5.
- (5) Laud, p. 5.
- (6) Laud, p. 6. 1631年に出版された *The Psalms of King David*, translated by King James では, David と James が “parallel figures” であり, それは David の伝統をついだ詩人兼王でありたいという James の生涯にわたる願望の反映であると Doleman は言っている。James 王にとって David はとりわけお気に入りの人物であった。(James Doleman: *King James I and the Religious Culture of England* [Cambridge: D. S. Brewer, 2000], p. 149.)
- (7) Laud, p. 6.
- (8) Laud, p. 7.
- (9) Laud, p. 9.
- (10) Laud, p. 13.
- (11) Laud, p. 13.
- (12) Laud, p. 14.
- (13) Laud, p. 14.
- (14) イスラエル人とイギリス人の類似については Mary Morrissey, “Elect nations and prophetic preaching: types and examples in the Paul’s cross Jeremiad” in Lori Anne Ferrell and Peter McCullough eds.: *The English Sermon Revisited: Religion, Literature*

and History, 1600-1760 (Manchester and New York: Manchester University Press, 2000), pp. 43-58に詳しく論じられている。また, *Christopher Hill: The English Bible and the Seventeenth-Century Revolution* (Harmondsworth: Penguin Books, 1994) の pp. 264-270をも参照されたい。

- (15) 1847年版の編者である John Henry Parker は Editor's Preface で “Laud seems to have been an imitator, or follower, of Bishop Andrewes: and in some particulars the resemblance holds.” と言っている。
- (16) Laud, p. 15.
- (17) Laud, p. 15.
- (18) Laud, p. 16.
- (19) Laud, pp. 16-7.
- (20) Laud, p. 21.
- (21) Laud, p. 21.
- (22) Laud, pp. 22-3.
- (23) Laud, p. 29. ジェームズ一世誕生日記念説教は William Tate によって採り上げられている。Tate はダヴィデよりはソロモンとジェームズ一世の関係を主に論じている。William Tate: *Solomonic Iconography in Stuart England: Solomon's Wisdom, Solomon's Folly* (New York: The Edwin Mellen Press, 2001), pp. 98-110.
- (24) Laud, p. 63.
- (25) Laud, p. 22.
- (26) Laud, p. 65.
- (27) Laud, p. 66.
- (28) Laud, p. 66.
- (29) Laud, p. 71.
- (30) Laud, p. 78.
- (31) Laud, p. 79.
- (32) Laud, p. 79.
- (33) Laud, p. 80.
- (34) Laud, p. 84.
- (35) Laud, p. 85.
- (36) Laud, p. 86.
- (37) Laud, p. 84.

- ㉔) Laud, p. 87.
 ㉕) Laud, p. 87.
 ㉖) Laud, p. 87.
 ㉗) Laud, pp. 89-90.

References

- Paul Christianson: *Reformers and Babylon: English Apocalyptic Visions from the Reformation to the Eve of the Civil War* (Toronto: University of Toronto Press, 1971)
 Godfrey Davies, M.A.: *The Early Stuarts* (Oxford: At the Clarendon Press, 1937)
 Lori Anne Ferrell: *Government by Polemic: James I, the King's Preachers, and the Rhetorics of Conformity, 1603-1625* (Stanford: Stanford University Press, 1998)
 Daniel Fischlin and Mark Fortier eds.: *Royal Subjects* (Detroit: Wayne State University Press, 2002)
 William Haller: *Liberty and Reformation in the Puritan Revolution* (New York and London: Columbia University Press, 1963)
 J. Sears McGee: *The Godly Man in Stuart England* (New Haven and London: Yale University Press, 1976)
 Linda Levy Peck ed.: *The Mental World of the Jacobean Court* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991)
 Thomas Stepen Nowak: "Remember, Remember, The Fifth of November": Anglocentrism and Anti-Catholicism in the English Gunpowder Sermons, 1605-1651 (PhD Dissertation, State University of New York at Stony Brook, 1992)
 Paul S. Seaver: *The Puritan Lectureships: The Politics of Religious Dissent* (Stanford: Stanford University Press, 1970)
 Tai Liu: *Discord in Zion: The Puritan Divines and the Puritan Revolution 1640-1660* (The Hague: Martinus Nijhoff, 1973)
 Hugh Trevor-Roper: *The Crisis of the Seventeenth Century: Religion, The Reformation, and Social Change* (Indianapolis: Liberty Fund, 1967)